特別
へ13
3633
53

特
門へ13
3033
巻53

昭和三十二年六月八日
宮川曼魚氏寄贈

三十二
蔵書

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

流女(ながれめ)とちのむかひ居(か)ねがたうぬるがまぐろ
とりかのよふに身を一切(ひときり)二切と切(うり)書し
侍るとの所ゆりにかなしびしひてく 床(とこ)
座(ざしき)敷のゆくちまなるともふ紙(ふミ)一面古(ゐうご)乃
んしつのこにかきすさび侍りしが さらで
これハ七夜(とさ)日紀(ゐき)ちんどのよかりしかれ(きやくし)

序一

そすちまれ左礼(さゐ)本(れん)とんふすの所
女(ぢらうろ)もしてみんとてかまつぐ申し
見しひぐ侍ゆすてて侍ま
富ヶ恩乃新にすむ
流女それなし
七夜日紀

子供屋

福清圖

伊勢物語ハ或曰勢女之筆作或云業平之自記未能決焉云云此草紙ハ妓女の送和なる事明し其故ハ妓女ハ事実を想像する情年端に感深し他の左礼本名より妓女の情を推量する説ゆゑ称しこのゝ所得之反古中将奇聿聊為奥書参

右　無名子校閲

部屋三味線

○附見大意

近来清人ハ着すれの艶史をて渡り妓戸媚門中国に蕃衍し蠻貊に及ぶ知る其書を閲に異域も本朝も人の情といふものハ此に変る事ハなきれども蓼くふ虫も好こ乃感ハいふなり明乃世にハ小里に金陵と云ふ公の花街にありて廓妓の風俗衣冠山と

志ゝ我　東方今の芳原のどく又今淺ゟ
清ぐひて一箇の外場ゟ荷り是ハ風俗伯人ゟ間
ふして浮花川の妓児ゟ似たりされバよしゆゑ
浮花川ハ風俗大ゟ同じからぐ趣又ひとし
からぐ清ぐども人情ハ一つまてハアく国もおい
らん国もむりしも今も詮るところハ房るまれ
其ゆゑ事ハ此ゟ清ぐども又何そびの脩が
ちがふといふ事ゟ何りよしハ云ゆゑ

浮花川ゟの何そびをゝんまゝバまづ初会から
まつたぐさかゝく見通しせ清しと抜ぐりさまだ
あとゝきりの第ゝん酒をゝ人へとしいまぞんざい我
そのゝく何そびとて清ゝるゝき毎うゐれどもよく酒
とすゝめ伴頭のしるゝ清ゝをゝことゝいゝせ建立
とゝとゝ金納をだ毎ゝ清ゝしてちよりし
何つら今着ゝ性合千金乃賛を散じゝあきびの
出来しゝ日ゝん者も一寸棚乃間をぬすゝくハ

南漢一行乃一切にそびに年季十稔の奉命
をのべる絶し故質をもんぬくも申く康へ旦り
ちきりなる肩乃紙銅子を湯ぐ志がりの
湯之りを法ぐで内を芝尾をくるめるなど
娯ましとを持ち申しまゐ法まゐ金ごうゐらしね
ど此間どうをう門ゐ浮花川よまゐる事
ぜくのし和哥町の且遠もことのとも事
まく取更小更に帰るゐいくらもにれハ

なりけせはしなきゐ唯却し買の何そび停を
なるゐ芳原遊の風流にしく撰を性和家一万事
の法傳なり雖乃蓋子のことなるゐだとを若び若
うやくしく拵を出まゐ娼妓の人威派令画漆より
をるく秋月の古今よりも停に申さしく上坐にすゐる
足ぞ浮花川に遊び法をとるゐハ坐し給乃問
究屋をうまく厨子の猿のぐゐる法とハ知ん
くりしてきまぐ浮花川乃人とうしに志がぞ唄二

くさりいるここの宮は蘇公着一ツ持逆ひかれば
忽然(こつぜん)として雷乃(うんなり)抱ちうる跡(あと)のごとく(チド)何ちらへ
せ追立らるやいな妓児(こども)の床へ思うもたゆく
床とべにのきぬ法なるまで足をよしつゝあの所に
はあやとより追つゝまうなんとちまなりかの
抱つゝんの床納り抱まん間をとべ男をとゆつ
るゆりとせし床(そと)入に雪くはあそまでとあるも
んをゆるすよ持(まと)縁の遊とやいへん足を呼遊

罠の男は志まつたくしふとまくいれがせいつ
か死なるは志ゝねとモシ(ニ)ぬしは川を氣につま
まいせしつちへよつて祿なんしもコウおめへは
きうふ川ゑよおひをとひく祿なんしまし
もとばかりまでおかつれ風来山人足を嫌(えん)し
此乃の先哲(せんてつ)よしとちの人情は清くしられた
いまだ浅花川の情同ふしくおもむき芳
氣と呉(こ)なる文勢をもらばゾンよしいらへ

そし夜ひとりロのうちぬるこひ何よかべよ
のれく志のびとなれ新内れなげかしをひく 〜 ミアリ 母のへ無
いとゞ志母くまゝ何げむりなまゝだしいは志母んさ
いかにはゝめの身じやさくも 心よ二ツハないといな
チヤント 記き 志まひ 母松 母そのさんどうぐ母何だと
さむけ
悪寒がとるゝ人業をこつゝめ母うゝ おその アイザ
わりれ内ゝ女の作りぎゆへかたにハちつとん
ともちがよふごぎひやとてヨ ふびんやおそのハえよりも
母せがこちよくなれ
おりてだんじ母うるこゝ母ゝなしきまれ母へなるけ母まひ
その母りがけも母ゝ後ふくかこの毛ぬけくいろまさめ

さんきくの
去茯苓の大ふくに始てこちをしてゐる母へ母こつかれてる様す
がこれだにゆうまいの大夜風にあふてるどくしぬ心ひをうし
ろゝちまれかして何せしこゝる白ひふくろの糸ひもとまり
ふくろをすじかひにわけ何らいなるむけにかけよぎにのこれく
様くぬこるが母りくおりきまくを
何げうちなこぐむそ乃ふぜい 出松 もともにさ
ゆりなんの
こつてナ氣を志つかりとこもち様へナなまけさ
こちちやアいり様へよそのかつりこんぎ
母こぬひて志まふと母そ洛しくこゝしや
よなつくどんな 渥ツ(ひつ)かきでも 癢ツ(うさ)かきの
お茶をとつくもうつるこまづかひハなひのさ

おそのかんにかういふ高賣をさるこのらハ
ぜんぴ一度ハ下のまんぐらひハ何りうちと並
くかくごハしくぬゆきそがうち悪ゆへとハ云ひ
みがら（しくち）去地に借金（しゆくきん）ハするし氣のもめてう
やされたさかくさんがきく内ハ世うすを愛
ゆしゐふとんぷんもよいくまゐかくさ何
ぴり出入が出来ねへそうごがりとしハ目に
何ひとゐるしかんに洗ひとくるしひと

どぐいきたぢをさうさふりこんぐ乃
病氣をさいまひ何を死んで志波
いふかやしひゆきがまぐ久年何る年ン
季（き）の内死んぐ主人（しゆじん）にそんをうきてハ
まんちやアうの波ぬとしふから ホンニ氣乃
くりだんりぐいきくゐやきのぐョ又
とれおかさん乃公いきてもうましひのサ
けちなるごとも座るどでハかくへの志きせ志

扨そ後しくたちをさ川ぐ夕一ぞよとし
世せんハ夕ホシニ二上りのいてこの通り死ぐらんせ
ゑ事やおもひ母の身なら死ぐらんせまもしよつら
何くにトハよくいつ川さ文句ご稼へ おそのホシ
おめへハあきれけいるよもしちさんの母うな
男にア扨もまてハ誰しもまよひそうな
ことんごさでおめへハ氣がとめ母うョロめへ
なら来めへなら何そんの稼へ男ごとも乃

イ名 せじハよく川くいさけりこれぞかれ
稼ばされがむり トいふものごよ おそのかゞせごさ
稼いの母うあ殺と公ぞそくさびしひ母うで
ねくぬさう何へハまくきんそうに足のちうひ
をねにんしてイ名 世ゐるとうてゐ身を大せ
人よりの事てく世事をよし トいふいくさ乃
母うに身にはまされやすよ おれうさア稼へ
その文字を流のかれる家人といふ云ぞんなもの

ぶぬ様へ [おその] ことのびくひと思ふ男尻はきつとこ様へ
りのさ誰しも覚えのあるまでで初今はあぐくとう
いく男とうおりし所そうなおまれやすが
末なぐく出くるんれバちゆうしだつうりで
さひ様かちゑがなく男づくでも続づくても全
づくでもこづくでもなくかつゆくなるもないい
そのつまうも知いまだつかりてごぜいまてョとのちは
足でもとり性ぐくなぬとへ三日なりたひとのよ

なる事で出世のるもおりのぞふつと見えんざ
がせいごのまけ阿弥陀如来お釈迦なるおだ
おぞ二親のいけんでもさひかへしのないが女の
ならひで縁り所くなつるも今さらおりへバい
さんもうんのるいのき [お松] 其そづの池ゆ六さんこ
おめへのるは湯屋でもこんなかひゆうだんまる
日程月ならは喰おりしろくふとさひやまがこつて
どうしくをまる日になつちゆわだまでいるゆだつ

かまぐ祢へシシ六さんとおめへとがなれそめ乃
そじめからそなしてうさをうまそれ祢へな かたの
うまそまでも志祢へかとりの八幡さんの祭の船
の事よおそろしくよひきつてつかれて祢へ
いやしたが下へかりてあそうまいをおしし
らへて魚べてゐる所へいんぐるとと富岡から名
ざして初舎のロがかんさとおりひなせんし
ま河出るがふつくいやぞくはらいからはしを

はいて出めへとしひやしたが侍におかみさんが
ゐるゞから姉けいきなとしひながらいかく
もいそまぐ引ぞりをかるちんぞれていて富
岡へ出る所が大一度のその中で六さんの船
の盃がうるしゐるゞが悪所のはじまりさ
その河まんざらで祢へとおりひ中たら何か宝持も
よくあるゞやうでどれるもとつちへおよんなさいほし
と女元のいろる河さんで六さんのうしあまはいを

いふ事もなくいひたゝおもひてもモシおれな
男といふものハ何かありしろひやうでゐて
こゝといふものされがひよ口数(クモ)もいやうな事も
いえぬやうでも何か三年もなじこゝろざせ、
みまうんさんいきになりやうあれて内へ
ゆると何か落(かつを)しさやうにうつと望としてゐ
こゝ望ひ出してんおりしろくなりてんゐき
のいることをいふり外の事屋からロがかゝる

と志えたんだつ出るが浅くく家屋へだより
え入りたんでゐるく得んは家園といふとおその
さんハいさゝで出やうがちがふすと新屋でみん
なゆもいえれるし六さんときくと花んへ
出るやうでございまあんまり来なるる
度にあれてぞうなるでも知るなようにお
りゐまううとおりつて折手しハ女に前へ
とをして外へ出てゐやすが今あきやうと

うそをゆつて法くつておいてくんなとたの
んでまぶ世おりんせぶりにおそく出ちり
そふかとおりんと一度のお歩に外へでもゆる
事をきくと志がこつきていやうにはんらいが
ふつて〳〵却と里ゆきをもむなどは女房(ゆうばう)なり
どもの世うでおりしいぶやア稼へかへ又一度の
多いもりしあし志さ初手の内は緩(ゆさぶり)でいて
ゆうなりのいざこぶやもめがでれてつい

中まれがしてもらくはそろつて二稼へもれさ
その中で六さんは却と里引越して折のまるは
晩などもこるいはなかじことをそなたつて
あその後も法事でおねて志願くりなしに
名代をとつてつれぞ大事でせう我やうせなと
そのふるまいごぜんせんよ(ホンニ)初手の内六さんは
ぜるんこれ人ぶとおりんてゐ申したが永宿流と
いうきね内かけもりんてきなせんせゆうな

ちいさん寄ぜんさまごからきげんのいてだんハ
ともにんおりしろいせうで姉さいでねなんを
なぜか寄ふかんてあんじるせうになつてけどろ
でもちんとおそいとよびにせり逢つる前が思い
ふりのさんがぬんだろりでもいい息をつき顔を
つき合して両じ志て頼をおりしやさしよ
どうしくといふものハ神手の門ハ浮寄でゐんへ
ゐもまる寄がわり申しさが今でいらんなにきう

志ても十二六さんの事ハ来のせうにならいふの
色の意のといふ訳でハ様へが内にはなる所ちの
とせるにあるる恩があるからまる事さと
かくも寄ふなるといふも法四ら様へから
おこんる事さんとこがこふ訳がむものか女庇
がちんとしるるでもうるひと六さんよりまつち
が後からんてくゆ申しくなるもぐちゆへさ
六さんごとそもせひ返しさあげくご

は苦労(くろう)せずともいつさいは呑込んだ様へ(ナント)、おまへの
噂(うわさ)せずともしれたものさがりしが客気の
心意気(いき)にならつて遊(あそ)びの世をもせぬかゝる
おめへあきらめ気の心にあつてもちやうどよく立つて
又んな様へお　おきの　事にど、おめへはおまへのせ又人だけ(ながら)が
さよせいが様へくはお客をとのさゝねお客気とよ
事があるやうと思ひちがうてすゞも気で
いゝつ客(十三)客人知らりがてぬしさつあいる様へ

ものでは客気はちつともくずろうと客様をも
やつぱりお客や河らは外の客座よ出てその客
の事又河一寸盃(わい)にあら代のきんぶうき気を
出してわるい様(ぞく)をとつて思ひの外いつそ気が
そのきん気そう気又お客も思ふまゝ事があり
てよそよが濁(たく)気より少しのむつかしいお客にも寄捨
ぶくいものでこんな後のものゝいゝ様へのいゝ様へ
お松　そのゝ又さよせいの様へ客気でいゝよふな

折がうるく外の茶屋に出てゐる時なら嫌
分や女がきらせばにおかねてハ御でアノてゐに
うらまきやてうらぜ出備てこゝかしいふ
ものなれど備る所が一寸遊ぶくるんかりで畢
竟おりてせぬりに宇だかりとるくきるなら
ものでゑ代のるゝ内のあんどうしかいづき
板をおろちゝてゐるゝを出ばりんぶらしる
るゝもその事て名代なら寝るが出りめを

おりんて寝るものでおまれハ後のたくきにはしき
諸くない目をするものゝからなじミ乃
とこへさんぞまときらせばに初會の部で
い中だし海気でもよんでなじみをおらう
してせろこ取せるがその晩をおりし諸く遊ぶ
といふものゝきりしなじミをなじミとこそ
名代をとんて空に目をするハ情のあるか
おサ又如ら気の方でもあつちのかきおもし

一年とかぞ三こんぐらへ何にも志そのちは稱へ
でこいまは稱へ志やうぬらないよ子イ [お松] 仕舞を付
ておくるお客はやはりよかくもこられぬものなれば
はぐとみ首どうてくるものぶう才ぶ面ひいちゆんとて
待てゐるかいのきおお客もなげんで呼ぶてしふ
子なら無者とちらんといへてかきさへそれがなる
まずぐらう霄洞を付るがは江戸まきて思ひの
子がなひ時は不異なものさ昼仕舞のおお客は

[illegible]逐年ゆりそびまそぜひ惠しいなるものさ
間を買も同じ茶屋に仕舞でおお客を待てゐる
子なら無ぶ遠とういふ事もわれと外の茶屋
に出てゐるを借て間にしてゐるはお客の人まんさ
さ紀の茶屋からは屋にくる何うせもしなく
見られて行で蕊者を買て居るもちやひ
ぬ事のしてものサ [おその] くると二日三日ねつぐけを
しるゆ者気がならば是の遠いものサ 鵜鶘の名を

きんこうにはすまきんてゐると又姉らしく坐
きてあじこんなじみゆして外のうまも唯だ宮又
日もぶんなぐれわまりも出面紙てもうるひかう
とて俗元もかぶんなるようにさしめ逆舟の
追かけが来る里内からも用かわるこゝ紙が
きたり一度か友達元が逆まきてもさるけて相
かへりまでそう此とありふとどふいふたり合ふか一文
れゆの事れきれこゝうふかんとうるものサその

遊も絶て警者をよびえ意よく酒をのむか
とありふとつかれてきやく寝る里宮日も又日も
只うかくとゐるのの見ぬけるなんさといふ事
てもれくの弱くなんさといふ事でもなく酒飲
か却て女房持などにわるものでこふいふ事元を
とまいてのサ居續のお客をとんてゐる内は手
めへのかいぐのやうでいくなものさがその行ぐ
外へ出るがとんだ法ふものサ お松 又酒飲事の

てアノ女郎元もいく年代して鷲ばゝ杖でもつ
いて様子をわがれいかどくはるくいふものだから
自前代世ぐほど人の年ゝ成せるものを
ごぜひせんにゝよんしやすくえ入也茶屋だやア
法ゝんてもくまるが自前といふと念替をする目
中々去地の方元代他所へ知るにやくるがいる
ものだから抱のうちでも元のやうにいかずかしても
つかり稱へハナどこの事屋でも番頭や娘分に

とるを法ゝんてあり稱へと海んざら出来りに
なり前も外の子を出ほうないぢりもあるのサ
[illegible]アノ近が如くて帳場に来しにあるかを待てゐる
時一度へこんな来しにあるかて知とりさかるハ恰
好のまるんものさ子イ出て居元でもせぐにもうる
てくると廉屋や髪結さんに借が出来やすを
を帰しなり腮を知りまたり出てゐん稱へ動
定さに高門を仕借にやアいか稱へもなりん

が腮を出ひといへてもお湯へまゐも内で斗
多べちやわ小ゆびのめへ（にゝ）おりしいから茶屋ぐ
たべるゝもしろなんがかじ三の丸の侍（そば）ても迷
者ふちやづまだやりんのふてもあやまるやさ（ふ）
おその かんに抱の内へてあへの出らざで縁よらな
ものでいふてもあるのさまだから和（ひら）奇町なと起
ぬる辺の初會なとゝやわ虫が出ぶるの酒に醉
てゐるのと我まくをいつて出縁のサ表神（おもてかく）楽

なとでもさし城洛いて茶屋でやう海しく
いふとや話を知つさけてるまでも屋へ急ぐて
仕まうよふにまちおからさぐるやうな事ぐよの
子もあるそうさ お松 そんないふてなるは姉せ
ぢやわなりやせん更ぐらく芳原（うし）ぐらく尺ると大（かし）
きれてんちらは勤（つとめ）いふ西さ丸の宿もふせと呼
出シとは遊びのれてが遠ひ抱と自前を聞くしても
お丸の目に見るのサ おその ホンニ 口出りやさようよ抱

の内ハアルヘガ多くお客ハ目前ハめくハなどとも
たゞ残りしてもらへて姫分や女流ハたてゐまる
かうまつく正月の仕前も裁目をれを洗へめ
る圖を洗ふ洗屐をいくら姫りして様の洗屐を
いくつ出しさアノ子ハ老ひきのあるまでと出さ
れでもいゝ去地へ名を称しくしかりのさモシ
お客の身ゆきとし姫流のお急様へ女扇流
おどけつく当りが和らかで笑ひこゝかなりの花

ろうチイ抱より目前の子ハ私へ花ハお客もたて
しが出来て抱かりおりしろ和がありや志あう
お松 どふしても至ら様へ内ハお客の一人か二人か志
くおろうとてナシノどふまるものかといふ事がある
のサ子とも流もお客のまゝ流ハなるようになる
とおくわサ おその 当もその袴の裁ざとるより
もお客のきあんがとゞまゝにいくやまでが
お客より部屋の洗さやれがとんだむづかし

い稲へ【お松】わるいらう部屋などのみどもに
ゲミんな人がいらうサどこの部屋でもこのくもめ
のあるものサかゝる急でもしてのらうとそ稲まれ
るし結(しきせ)だより急(き)てゐて又稲へたるいき
の稲へよふにはるくいかし浴衣(ゆかた)などをちみんと
うらいておいてもくれんのはるいふの出来をろ
こ稲へ内は急ぐにあるに目をして待てゐる
もホニ若衆(くがい)とおくいるものサだまんてぐらん

の法き合いらが槍(ぐしだて)をうきさうして油を出す
しり筆(かうがい)をおの屋まるまりするも年をよく
かんよりしにまているとおうぞう稲へはなてめへ
のいりじがせんたく前ごろ人の裁(きらせて)のい
りじ城とりちがふなりでとりなしにメて
出るそまなどがあらあなかぢきに茶屋へいつて麻
うら呼出してメかへてくるゆうに去稲へと乃なしサ
いりじいてまでも元まらんて見(ゆる)さ紀のかくまる

ようなぬけたくもあり〻家婦しぎりなをさそく
もありいりじ城をきちがひたい無んにきざなものサ
おその 又藝者衆も若衆ごねへ見番が出けてから
出ると寝込から出るものハ仲間でよくもいう様へ
りのごが女房子をもんたまえ衆ハ遊でもかせ
が様へけつもやあなたをもりたも自前をか
せぐてまりハ割がうるひからせん様へそうだすイ
一日寄場のいろまのそるに欠をしてゐるが何る

かれこなりへいなしこの者衆で二朝から一度に
口が出んで出りきら様へでそんなら誰でも呼ぶ
といふ者の取へひ女なる藝者衆が誓りに出るのハ
高賣づくといいながら知るものだすイ お松
ならんでわる来屋の内でも雅なる日もあり
淋しい日もあり藝者衆のお客の事に入も
どのいふものうまりやせんよ雅賣もその日に運サ
一ッ門のまどもで仕舞があるより買出になるやう

志ておやけへされ祢へほど寝で板がえんなうれて
志まうゆ水部屋に独(ひとり)おてゐるゐ魚んちれなも
のさ(ホンニ)勤(つとめ)ゆ志るものゝ独でゐれざ淋(さミ)しくて寝(ね)
ゆれ祢へのだといふ事が遠ゐござんせんな 【おその】
(モシ)むゞに藝者を買ふ事ハいらもあるがそこへ
ん付をとるお客ハ祢へものさ(ネイ) 【お松】 お元と
いふものハそこのいふ事ハ志ゆうがこゝくてる
ども元のいふ事ハよくきくものでござんせんが(む)法

んぞりハきくようできる祢へものさ 【おその】 新るゆの
河ら迎(まえ)や茶屋の若ゐ元がアノ者も何度ふると
思ひなさるのうんれてもいふ河ゐがらのらのうんん
なせんといれれてもおゐ水向てかし場ゐやのて
金ゐるとゐ迎ゐ母ちゐ付ゐなゐてゐてゐまゐると
いふ事ハどゐもいふふひものでゐてそこらきの
祢へおうふいれ志るもつらん祢へ 【お松】 去地よ志
て新るゆやおゐれるゐどくんなと新るゆく者元

の湯のこと行ふてまゐらせ流の寝てゐる床へ起出来を
志る若ゐ流がきてくどく事があるのさ二度か
三度恥をかくせてもきかね様へ時は男人を引
留てあるくなんてかゝる事がありゆゑ是を始末りとゆふそふさ 【おその】 モシ 度愛
をする娘分や女流はお客の人沢が身ごとや
ゆゑがまゐらせ流もおなぶの兄よりがあらん様へ 【お松】
お流は百人百色でごぜひしがしんいんて兄よりなる

茲者賞といふ事ある女は大分酒のこと女ふあるもので
遊びも大風ふ人へて床へ入ると此ぐに寝て寝
たり色事がなくていよりなかねでごぜひしがよりたん
ぼうに酔立てと床で様て寝まうは客は女郎流の
身にとんでいらましくわへものさ極て狗迷る
事なりどもあてゆゑなるやせんがいろも無ぐやか
に遊ぶはおなぶらく生なりとそうらも持
ぬぎるこよいふお客はいやこ事 其仮抱さへ

おくとも二座もうらの蒙ぶんて世ゝ毎せるものゝ
うら限く足が近くなんて見ねどとゝるに来ゝ
ヨうらぬとおしい足の遠い所なを遠うでも世様
ばならぬ場(だ)になんていゝ事をやめて志んなを遠
合にまゝと粋(まい)ばかしいなんてとゝ底の入替
所といひ君をゆがき様のサ 【おそ】 又六色ゆかぬ
がきゐるゝふうで見へのあるゝだふしゝ君底で様へ
【お松】 その家ゝ色ゝ年ゝなんとも見せるが世ぞり

その客の見へサ見通シに大おぐらをかき酒の口
おどゝ成きゐて見てヨうくいて蒸者底や女底を
口きゝるなくしゝまして底にいかゝ角のぬふうで座
数がながいのサどのもが合にうぶうしくをいて出
こふいふ君底ゆい小僧(こぞう)になんてまゐされてゐるが
こんちのみサ又や月に嫌うしいゝぬといふ
風なお底を初舎なとゝ盃(さかつき)をさゝれてよき
ぎよくを二座にやりなどしまゝさり嫌りにかりめ

女房衆もよ同じきてそこへまゐる事は此様へ
客衆は顔がゝあゝ様へでよく様へりのさたとて
満んざらでわれ者ゆゑも此様その様へうちは
多なども出され様へのき[おその]モシへおの初會に
出て此は客は外まなじこそもあるゝ此船頭衆
に吹きていたれどこの行屋の内へいかゝ思ふるが今
ぢやゝいきなさい様へなどしいふ是はよくさせ
よかそしていたのサ娘分や女衆なども同ゆつれ

た客衆などは床へ出る時モシ おたのんかゝやまたよ
なぐいつて屡風(びやうぶ)を引ゐてゆくのサノ今まで
誰(ぢれ)をよびなせはしたとおあにゆきとそこ遠(じき)は
いなさるものではありやせんがてへげへ客衆の思ふも
はしまるものでその中は実なれてくる客とは
客をたのしまふよぞかとおりゆゑはなれそので
ごぜはまて様へ[お私]実満よんてくるあと何か
内に事のわるゝ事があつてやまかなんてくる

耳の鳴がいたこの三弦のようにゆゑへ何ゆゑ
苦労な都つきにあなり同さへくだんてこれ
あがら面目なく友達にも知れてさなさねように
なると遊びも思ふこといふもので取給案ゆゑ
舟いきがけの結構といふ金うけんが出るのサ葉屋
子どもなどでもなかれ正月はいふまさせきその
衣元もおりし誘いでいなく粉くやあに
なんてくるのだから出るにはんづかひなものさ

遊ひの今といふものは無理をさせるものゆへ夏中
になんて詠ぬんのかんがへなく勇こなうちゆゑ
ふひの外舞臨の出来るものなれど楓の落
たよふ丸さんぞ里と志まんさ目ぬは部こく
ぎしりくとなり借金の骨がらことなる
のサ足も一生の徳高價夢我見ることのき
らめるより外は出人も稱へのさ[かなめ]それを
情我賣がこんちの商賣だから罷にもなり

やまとめへがモシ床をどふまればよふごぜひ志よう
祖へ【お松】リレてまだも元ハ一ツ部二ツ床三ツ事と
中やまと部のいへハそのゝ子れまれ対で見ゆゝる
さねようなものゝ床てお客をこゝろまゆゝ志んに
妙がありやひまのあるゝさしてもなゆゝ子の押迎
て出をとるといふものサ今でハ床よりでなくて
ハさやりやせん碁橋和尚町おこりで初舎に
常越とくよふまなりゆしたもをこゝろ乃まゆしさ

【おその】あのゝ子ハきやゝゆうもいゝがなぜかお客がつゝ祖へ
といふ子ハなぜこれへ【お松】それハ合と紀ゝ同をお
いてお客の部をゝんる癖のきんとあるゝ子サ嘘も
そんとするようにお祖へと名元まよんて情のな
いように思ふものサ縁の同里もの続けて条のい
がゝる床へ青葉越さんでおくと合附おかしゝ
匂つてあいその法きるものごろゝ名元をゝんて
床でそれら祖へがいゝのサ臨痛膏ハ出るゝねへ

おその 婿(さ)宴(つり)二日ハ[illegible]がたしなまれてが又[illegible]を
湯へ[illegible]そこの人で出る子などがあるそうだ[illegible]
といふものハ内へ[illegible]て神[illegible]もまをしゝ[illegible]ものだから行水(ぎやうぶい)をとるとらずにしてハ[illegible]の罪になる
[illegible]の[illegible]の[illegible]又[illegible]の[illegible]
うちハ[illegible]ある[illegible]
びので[illegible]人で[illegible]
[illegible]

[illegible]ハ長く[illegible]の事で[illegible]合ハ勤をするもの
[illegible]が女の[illegible]
[illegible]が法(ほう)[illegible]
かりふせ[illegible]女[illegible]の
きらいなものハ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

もいふ事ハでき禰へものサ [おその] 長くても出来るのハ
いくめかまらまるのハきこゝがゐるハ禰へ [お松] でも
禰へ事もまけがごぜハまゝ何ぞに喫つてゐる人か
何か事に嫌さゞ事のある人かゝ久しく遊ぶ
こゝ人かゝ事ハいづまで出来るものさ [おその]
おそいく事ハよらしで女房持ハ志まる禰へ
客元の情のある禰へをためして見ませう
合て紙をとゝて志満ゐておまてからゝ又アイと

紙をゆる時ハ小をむけて出後てゐて志ぞらくこゝ
をむかぬ者ハきんと情がなれよ [お松] そよいの頭
うんむけになんて見たれを嫌さんにしり付てゐる
がいか客の息づかえをうんぜへてゐるのサ 夏床に
満くりなぜてかく蚊屋をかゝし松忌城さか
さゝかけゝあり志ぞしめる阿扇風をうしよせると
志まんてゐる阿福をうけてくまてりしる者
元ハ床師のかえ禰へのサ [おその] 底で、かゝ者を

ころまも妙といふがきてのぶ〔おれ〕いろそつ見てれ
よといふがらの爪さ見をとして、お宮の足へ而て
こゝろでもいく事ハ志いんとのながら下の手を
抗のゆうゝ思ひ出さしこんで、お安の下ハ嫌ふち
のうゑの下へ志りせ〔おその〕そゝみてどふまるへ〔いふ語へ〕
〔四シ〕アイ、おれさん富岡へ出ましておいそ見ぐらかん
やくよ〔蓄延の八幡瞳〕ボヲン〔商人〕蛤やさあぐり

冊畢

○附言

夫黴瘡下疳便毒結毒之病近世尤盛而貴賤男女罹之者。十居其半是和華一轍。蓋承平酣歌之都會。人人樂安佚內則膏粱膩味。常充口腹遂生濕熱瘀血外則沈匿柳巷花街。以動蕩淫火一釀成此病。遂傳之娼妓男娼則娼妓男娼之傳諸人也。不知

其幾千百或傳之妻妾或遺之孫甥
而終身爲癈痼之疾豈可不恐謹哉
予非醫家是雖非所關姑記爲世之
鑒戒噫房勞野合者深戒之戒之

一名曰抹燈去
遊僊窟烟之花　全一冊　同出版

揚花水性
浮華川容氣　全一冊　同出版

u5462